

国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、16 ページにわたって印刷してあります。  
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、  
解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものを  
それぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、  
「や」などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書き  
なさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。



1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 朝早くに港を出帆する。
- (2) 鋭く世相を斬る論評。
- (3) その情報は眉唾物だ。
- (4) 山奥の閑寂な住まい。
- (5) 人間万事塞翁が馬である。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) カイシンの友と語らう。
- (2) 夢がかなってボウガイの幸せだ。
- (3) フタイテンの決意で臨む。
- (4) イチヨウライフクのきざしが見える。
- (5) 意見のサイヒを決する。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

定年まで勤め上げるつもりだった銀行を四十代半ばでやめるはめになった佐川光義は、趣味であった陶芸を新たな仕事に選んだ。銀行員時代、営業の最前線で文句も言わず懸命に働き続けてきたからか、依頼主の要望に応えるやり方が自身の持ち味になり、徐々に顧客を増やしていった。

北海道という土地柄か、茶の湯や華道の伝統が根底にある<sup>①</sup>焼物<sup>②</sup>から離れた自由すぎる気風が、光義のやり方を後押しした。

その姿勢を、柔軟に過ぎると揶揄する同業者がいることも知っている。だが、「落として割ってしまったがまたあの軽い茶碗が欲しい」とか、「あの皿に盛れば子どもが食事を残さず食べてくれる」という反応があることの何が悪いというのか。

競争から離れた職種で生活が成り立っている以上、使う人間に添ったものを作れば自分はそれでいい。そう考え恥じることもなかった。

そうして数年が経った頃。ぼちぼちと器が売れ、毎月二人分の食費ぐらいいは土から稼げるようになってきた。しかし手が土に馴染めば馴染むほど、練度が上がれば上がるほど、<sup>①</sup>光義は自分の裡<sup>③</sup>からの声を無視できなくなる。

俺には芯がない。

使う者が望んだ形を作る。自分のイメージを形にする。そこに疑問はなかった筈なのに、長所たる柔軟さこそが光義をゆっくりと蝕むような気がしていた。

逆<sup>④</sup>の情念をそのまま粘土にぶつけたような前衛作品を目にすることが辛くなり、同業者の作品展からも足が遠のいた。情報交換をするような

場からも、作業に没頭している振りをして逃げ続けた。

俺にはあんな熱がない。

俺には巧拙を二の次にして挑めるような力はない。

皮肉なことに、孤高を貫くことさえひとつのスタンスとして周囲からは認められてしまう。そして同時に<sup>②</sup>蟠りは溜まり続ける。出口はますます遠のいた。

芳美と札幌駅前に出かけたのは、腹に抱えた<sup>⑤</sup>想いが膨らんできた秋のことだった。

たまたま、妻の友人の友人が駅前のギャラリー兼喫茶店で個展を開くということで、誘われるままに光義も足を延ばした。同業者の個展はなるべく避けてきたが、その知人は風景を描いた水彩画が専門だと聞き、気晴らしに出かけた。

「ああ、良かったわねえ。落ち着いた絵で。喫茶店の<sup>⑥</sup>佇まいも素敵だった。」

「そうだな。いい個展と店だった。」

午前のオープンに合わせて花を持って訪問し、まだ客のいないギャラリーで絵の主と歓談してから喫茶スペースでチーズケーキとコーヒーを頼んだ。絵について光義は専門外だが、ただ道内の景色を綺麗で美しく描くだけでなく、一枚に一頭、もしくは一匹、必ず動物の姿が描き込まれているのが特徴的だった。

鹿、熊、狐、エゾリス、シマリス、馬、牛……。いずれも、可愛らしく描こうと思えばいくらでも愛嬌ある風に表現できるだろうに、どの動物も、じっと睨むようにしてこちらを向いているのだ。

〔動物の姿が印象的です。〕

思わずそう口に出した光義に、芳美とそう年の変わらない、専業主婦の傍ら絵を描き続けているという作者は微笑んで「そうなんですよ。」

と答えた。

「動物を入れないと、どうも気が済まないんです。」

曖昧で、そして、秘めた拘りを聞きだすことを許さない答えに、光義はどう返したらいいか分からずぼんやり微笑んだ。

「ねえ、お昼、新しくできた通りに行ってみましょうよ。」

歩道を歩きながら、つらつらと今日見た絵を反芻している光義に、芳美が声をかけた。

「新しくできた通りって?」

「赤レンガ前のところ。前から工事してたのが、終わったんだって。歩行者天国になって、両脇にお店も沢山できたらいいわよ。」

断る理由もなく、足取りの軽い芳美の一步後を歩き続けた。幅の広い歩行者天国の足下は全て赤いレンガが敷き詰められ、通りの西側行き止まりには愛称「赤レンガ」と呼ばれる北海道庁旧本庁舎があり、その名の通りレンガ造り巨大建造物の威容を誇っている。

「なんだか久しぶりに赤レンガ見たな。」

「そうねえ。観光名所って、地元だとそんなに来ないものねえ。」

レンガ敷きの道に立ち、正面に赤レンガを見ながら光義と芳美はしばし建物の全容を眺めた。話している間にも、中国語らしき言葉で会話するグループが嬉々としてスマートフォンで写真を撮って行く。

両脇に何軒かある飲食店のうち、道路に面してテラス席を構えたカフェレストランを芳美は選んだ。従業員に促されるまま、赤レンガがよく見える二階席に落ち着く。レンガ舗道に植えられたイチヨウ並木の黄色い葉が、二色の模様を作っていた。

芳美が選んだ、半分がトマトのパスタ、半分がスタミナピラフというランチメニューを光義も「じゃあ俺もそれ。」と深く考えずにオーダーする。

ほどなくして運ばれてきた料理は悪くなかった。パスタは茹でおい

ものではないし、ピラフも湯気が立っていて香ばしい。光義はパスタを口に運びながら、料理の量の割には大き目な白い皿を爪で弾いた。丈夫で重ねやすくして洗いやすい、量産品だ。

「こういうところは皿とかカトラリーで経費抑えるんだよな。」

「やっぱり見ちゃうのね、そういうところ。」

窺めるような妻の視線を受けて、光義はフォークを置いた。

(4) 「俺はもういいかな。」

「そう? さっきのギャラリーのチーズケーキ、ちょっと重かったかしらね。」

「いや、なんか少し頭痛がするような、しないような。」

「どっちよ。」

あまり重く受け止めていない妻の声を聞きながら、光義は目を閉じた。暗闇の中に、眼下に広がる真新しい道のレンガの規則正しい並びが思い浮かぶ。その向こうにある、かつて栄えた時代の、しかし今も厳然と佇むレンガ造りの庁舎。同じ規格の量産品を積み重ねることによって生み出された規律の美。

そしてさっきの個展で見た、穏やかな景色に映りこんだ生き物達の間。見る者に全ての印象を委ねるような、どこか空虚な眼差し。

「怖いかもしれない。」

光義は、目と目の間を押さえながら口を開いた。白旗宣言だ、と自ら思った。

「怖い? なに急に。」

「自分が新しい作風を作ることが。」

芳美はフォークを持ったまま、次の言葉を待っていた。慣れた静けさの中の、馴れ合った夫婦の間でしか互いに本音を言わなくなったのは銀行時代からの癖だ。馬鹿正直に構えすぎる自分が、今はひどく疎ましい。「新しく作るべきものが見えたとして、磨かれるべきものと自覚できた

として、それを成す力が、技術が自分になかったら、俺は、どうしたらいいんだらう。」

規格通りに几帳面に並べられた、なのに芸術に近いレンガ建造物。

日々の生活を堅実に務めて生きる人が、自分の中にある声に導かれて描いた動物達の表現。

今の俺はその、いずれでもない。

道に迷い、迷うことで心が苛まれる位ならば、もう老後なのだ諦めて土をいじることもやめればいいのか？ もう定年の年も過ぎた。銀行から一つの部品として切り離された時と大きく変わりはしない。何も見つけられず、何ものにもなれない。結局ここが終着点なんじゃないのか？

解答を導きだしてしまっただ後で、己の迷いが次々と顕れ光義の脳裏を占める。舌の奥に溜まってきた嫌な味の唾液さえ飲み下せなくなってきた時、芳美が口を開いた。

「あなたは本当に馬鹿。」

まるで、明日も雪だと告げる気象予報士のように平淡に芳美は告げた。

「もしも明日、突然体が動かなくなっただとしても、もっと年をとってよぼよぼになっても、あなたさっと土をいじると思う。それが上手いか下手かにかかわらず。」

あなたの望むようにやればいいのかよ、とか、無理はすることないって、とか、夫を肯定するにせよ否定するにせよ、穏やかな言葉を想定していた光義は面食らった。思わず、「うん、まあ、そうなんだけど。」と小さく言葉を返す。

「言っちゃ悪いけど、あなた別に人間国宝とか目指してる訳じゃないでしょ？ そりゃ、焼物でご飯食べられることは立派だけれど、あなたが何を作ろうと、何かに責任を負うとか、そんな大層な立場じゃないはずでしょ。」

(5) 芳美はまだ半分残っている光義の皿をひったくって、空いた場所に自分のプレートからピラフを盛った。そしてゴン、と音を立てて光義の前に再び置いた。

「おい、あんまり食欲ないって。」

「好きにやるしかないじゃない。」

光義の抗議を無視して、芳美は自分の皿からパスタを持ちあげた。

「あなたなんて所詮あなたでしかないんだから。私が私でしかないのと同じに。」

芳美はそう言ったきり、黙々とパスタを口に運び始めた。その静かな所作の底に、ほのかな怒りが波打っているのを光義は感じた。それは彼女本人のせいでも、夫だけのせいでもない。滞りのない日常の代償として、静かに深く折り重なっていった怒りだった。

大層な立場じゃない。

なら土にまみれて中途半端な有様で死んでも、いいだろうか。

\*<sup>せき</sup>鬼籍の父が許さなかったとしても、妻が呆れたとしても、俺は無様でいいだろうか。

光義はしばらく皿を眺めてから、スプーンをとってわしわしと行儀悪く飯を口に流し込み始めた。

あの昼食以来、普段の製陶とは別に、光義は夜に自分のための作業を試み続けている。

(河崎秋子「温む骨」による)

〔注〕カトラリー——洋食に用いる金属製ナイフ・フォーク・スプーン類の総称。

鬼籍きせきの父——レンガ工場で働いていた、光義の亡くなった父。

子供には、自分とは異なる苦勞のない生活を送ることを望んでいた。

〔問1〕<sup>(1)</sup> 光義は自分の裡うちからの声を無視できなくなる。とあるが、どうい

うことか。これを説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 自分には作品に対する強い情熱や同業者のような確固たる芯がなく、依頼主の要望を忠実に再現する作品作りに専念するべきだという思いから逃れられなくなっているということ。

イ 趣味程度の陶芸が生活の糧かぞとなり技術的にも上達していくにつれ、自身の陶芸への向き合い方や熱情に足りないものがあるのではないかと、自

う思いにとらわれているということ。  
ウ 陶芸の仕事を始めて腕が上がり評価されるにつれ、作品作りに対する熱意が薄れていき、このまま芸術の世界に身を置くべきか否いなかという迷いが生まれているということ。

エ 同業者の前衛的な作品を見て自分の才能の平凡さを痛感し、陶芸家としてこのまま続けるべきではないと自分自身を責める心の声にさいなまれ始めているということ。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 出口はますます遠のいた。とあるが、これはどういうことか。八十字以内で説明せよ。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 「動物の姿が印象的ですな。」とあるが、この表現から読み取れる

光義の様子を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 風景画に描き込まれた動物達の空虚な眼差しに、作者の表現者としての強いこだわりと情念を直感的に感じ取り、予想をしていなかっただけに気持ちの構えもなく言葉が口について出ている様子。

イ 風景画に描かれた動物達がみな、見る者に対し挑むような眼差しをしているところに隠された表現上のねらいがあることを感じ、作者に表現意図についての詳しい説明を求めようとしている様子。

ウ 風景画を見て、それが風景自体ではなく作者の内奥ないちゆうの感情を寓意ぐういでき的に表現したものであることを鋭く見抜き、同じ表現者としてその点に気づくことができたことをさりげなく伝えようとしている様子。

エ 制作の刺激になればという期待から訪れた風景画の個展が予想していた以上に素晴らしかったことに満足し、絵に言葉では表現できないほどの奥深さを感じたということを短い言葉で表している様子。

〔問4〕「俺はもういいかな。」とあるが、この時の光義の気持ちの説明し

たものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 自分の作品の価値が主婦の描いた絵の価値にさえ及ばないことを突きつけられただけでなく、実用品という点でもレンガの規律の美には及ばないことを思い知らされ自己の可能性に不安を感じている。

イ 作者の思いが色濃く表れた風景画を見て、目指すべき新しい作風のイメージをつかめたものの、自分にはまだそれを実現するだけの技量が備わっていないのではないかとのおぼつかなさを感じている。

ウ 風景画の個性的な美も赤レンガの規律美も陶芸家としての自分の限界を感じさせるもので、能力や適性を考えずに安易に陶芸という道を選んだことが誤りだったと実感し、後悔の念に襲われている。

エ 水彩画も赤レンガの建造物も、自分に欠落しているものを痛感させるばかりで、新たな一步を踏み出す必要は感じるものの、果たして自分ができるのか自信がもてず重苦しい気持ちに陥っている。

〔問5〕「芳美はまだ半分残っている光義の皿をひったくって、空いた場所に自分のプレートからピラフを盛った。」とあるが、この行動の意図

を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 生き方を決めかねている夫に対して、感情をありのままにさらけ出すことで、自分の怒りを伝えようとしている。

イ 迷いから抜け出せず逡巡する夫に対して、いら立ちを感じながらも、前に進む勇気をもたせようとしている。

ウ 些細なことを悩み続ける夫に対して、すっかりあきれ果て、今の不愉快な時間を早く終わらせようとしている。

エ 不安な思いに押しつぶされそうな夫に対して、何も言わずに寄り添っていく決意を、遠回しに伝えようとしている。



〔問6〕本文の表現や内容を説明したものととして適切なものは、次のア〜カのうちではどれか。二つ選べ。

ア 文章全体を通して基本的に三人称語りであるが、中心となる視点人物は光義であり、彼の揺れ動く心情の変化を詳細に描き出すことに作品の主眼が置かれている。

イ 「赤レンガ」「イチヨウ並木の黄色い葉」など情景描写に色彩を多用することで、光義の感情を色に投影して表現し、心の機微をうまく感じ取れるようにしている。

ウ 「明日も雪だと告げる気象予報士のように」など芳美の描写には直喩が多用されており、生真面目で物事を正確に伝えないと気が済まない芳美の性格が的確に表現されている。

エ 多用される会話は、夫婦の気持ちのすれ違いを見事に表現しており、最終的に意見が衝突し壊れてしまうことになる二人の関係を暗示する伏線として機能している。

オ 一見穏やかで馴れ合った夫婦の間にも、目には見えない些細な不満が蓄積されていたことに気づいてしまった妻の動揺が、「黙々と」食事をする芳美の所作に表れている。

カ 「わしわしと行儀悪く飯を口に流し込み始めた。」とは、もどかしさや迷いを振り払い、開き直って陶芸の道を行くしかないと心を定めようとする光義の姿を表現している。

#### 4

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

一般に、合理性と客観性は科学の両輪であると信じられている。そしてそれらは単に別々の要素ではなく、互いに深く関連していると考えられている。ではそれはどのような関係なのだろうか。（第一段）

人が合理的正当化に訴えるのは、自分の主張に他者の同意をとりつけるためである。しかし同意をとりつけるといっても、たとえば力づくで脅迫したり、泣き落としとして共感を誘うようなことは正当化とは言わない。正当化は単なる力の発揮ではなく、一定のルールに従ったゲームとして行われねばならない。そしてそのためには、自他の間でルールが共有されていなければならない。まったく異なる「合理性」の基準をもつ人に対しての正当化は無益である。これが意味するのは、正当化を行うためには、われわれは自らの判断基準を、共有された外的基準に従わせねばならない、ということである。正当化がどのようなルールに基づいて行われるべきかについての決定権は、私自身には存しない。このように自らの判断を正当化するとは、その正当性の根源を外部の他者に移譲し合わせるという、<sup>①</sup>逆説的な契機をはらんでいる。（第二段）

この点において、合理的正当化は客観性と手を携える。科学史家のセオドア・ポーターがその著書『数値と客観性』で描き出したように、19〜20世紀の欧米では、会計士や保険数理士、土木技術者などといった多様な領域における判断根拠が、訓練された専門家の見識や見立てから、より公共的かつ明示的に確認できる数字へと移っていった。ポーターによれば、この流れを進めたのは、利害関係者や議会、規制当局など、専門家集団の外部から加えられた正当化への要求である。専門家たちは決して恣意的に振る舞っていたわけではなく、自らの専門分野に特有の正当化の論理とエートス<sup>\*</sup>を有していた。しかしそれはあくまでその分野の訓

練を受けた者の間でのみ通用する基準であり、たとえば為政者や顧客などといった外的なステークホルダーが理解したり、その正当性を評価できるものではなかった。後者からの要求によって、専門家集団は内的な判断根拠を諦め、より公共的に確認できる数値と機械的な手順に従った判断様式を採らざるをえなくなる。つまり客観性とは、合理的正当化が本質的に要請する基準の共有を、より広い範囲に開いていくこと、そしてそのことによって同時に、判断をますます没個人化していくことなのである。(第三段)

ダストンとギャリソンが明らかにしたように、科学的実践においても、客観性という概念は知識の没個人化と表裏一体であった。それは、科学データの典型例としての役割を果たしてきた、科学図像に対する科学者の態度の変遷に現れている。18世紀において、解剖学や博物学における図像作成は、単なる自然の模写ではなく、選別された典型的標本を適度な抽象化や修正を施しつつ描く専門的アートであった。しかし19世紀になり、より科学の「客観性」が意識されるにつれ、こうした専門技能は主観的かつ恣意的であると忌避されるようになり、かわって透写や写真など、作者の意図を極力排した機械的手法が用いられるようになった。ダストンとギャリソンは、こうした歴史を、機械的客観性による科学者自身の自己否定プロセスとして描き出した。(第四段)

<sup>2)</sup> 合理性・客観性・自己疎外の間のこの関係性は、近代の理性概念の内にすでに本質的な仕方含まれていたともいえる。デカルトは、判断する能力としての良識 (bon sens) は万人に共有されると述べた。つまりわれわれは前提知識さえ揃えれば、持ち前の理性を行使することによって皆同じ結論にたどり着くはずである。またカントは客観的判断の可能性を、人間悟性の普遍性によって担保した。われわれ人類は同じ感覚および概念能力によって世界を知覚し理解する、だとすればその能力が正しく行使される限りわれわれの判断は一致するだろう。一方で、

判断における個人的・主観的な要素は、人間の共通理性を曇らせるバイアスでしかない。一人ひとりの固有性を取り除き、判断根拠における主体の役割を透明にすればするほど、われわれは「人間一般」に妥当する客観的判断にたどり着ける。合理性とは、そうした人間一般が共通して従うであろう判断基準の別名にほかならない。(第五段)

18世紀からの啓蒙主義は、この客観的合理性という概念に、さらに民主的平等という意味合いを付け加えた。啓蒙主義の（少なくとも表向き）目標は、判断基準を貴族や聖職者などの特権階級から開放することであった。政治的統治は伝統や迷信によってではなく、理性に従ってなされなければならない。こうした意識から、政治体制に対する批判的検討が加えられ、また経済活動を人間理性の普遍的法則に基づいて考察する経済学が発展した。また民主的政治の歯車たる官僚機構も、客観性を必要とした。というのも、公共的に導かれた数値は、立案された政策が偏りなく公平であることを正当化するための効果的な手段であったからである。(第六段)

\* 深層学習の興隆とその科学への進出は、このように近代から綿々と彫琢されてきた科学的理念、特にその合理性・客観性・民主的平等性の関連性を揺るがし、それに内在する緊張関係を先鋭化させる可能性を宿している。まず、もし客観性が特定の個人や団体の恣意性や偶有性に左右されないということの意味するのであれば、深層モデルの判断はきわめて「客観的」であると言える。深層モデルを訓練するビッグデータは、それが社会から取られたものである限りは確かに人々の判断の集積ではあるが、その巨大さゆえ個々人の特徴は完全に埋没している。もちろん、アルゴリズムに悪意のあるコードを仕込むことによってその挙動を操作するバックドア攻撃は可能であり、またAIの社会適用における現実的な脅威ともなっているが、しかしそうした作偽的なケースを除けば、複雑なモデルを製作者の意図通りに訓練することは比較的困難であ

る。そして何より、データ収集から判断までを一貫して行う汎用AIは、その個々の判断過程において一切人の手が介在しないという意味において、完全に客観的である。(第七段)

先に示したように、ポーターが描き出した客観性は、判断根拠を公的に確認できる数値へと移譲することであった。20世紀に発展した統計学は、こうした根拠としての数値を実際の判断へとつなげるための、機械的なプロトコルを提供する。しかしそこには依然として、対象の性質に基づいてモデリングを行い、また出てきた結果を解釈する科学者や統計学者の主体性が残されていた。「機械的客観性はけっして純粹に機械的なものにはなれない」。しかし機械の役割を際限なく拡大していくことはできる。もし汎用AIが残されてきた科学者の介入を不要にし、判断そのものを機械へと委譲することを可能にするのであれば、それはこの意味において「客観化」の極限的な姿を示している。(第八段)

他方において、深層モデルによって達成されるそうした「客観化」は、近代合理主義が約束したはずの利点を伴っていないように思える。まずそれは、人間による合理的な理解や正当化を拒む。われわれは先に、客観性とは人間の正当化という営みの延長線上にあり、それと連続した概念であることを確認した。しかしもし深層モデルの判断について、「それがうまくいく」という以外の正当化が与えられないのであれば、それがもたらす「客観性」は、われわれ人間の理解を超えたものになるだろう。こうして深層学習はまず、客観性と合理性の間にくさびを打ち込む。次にそれは、啓蒙主義的な理念である民主的平等性をも脅かす。その理念に従えば、客観性の希求は、判断を一部の特権階級から引き剥がし、合理的理性を共有するすべての人類に根付かせるはずなのであった。しかしすでにさまざまなところで問題視されているように、深層モデルの判断はそれを訓練するデータの鏡でしかなく、よって現実社会における差別やバイアスをそのまま反映する。しかも深層モデルの解釈不

可能性は、モデルがもちうる差別的傾向の発見や修正を著しく困難にする。こうして、深層モデルは現実社会における既得権益を温存し、そこに含まれる差別構造を「客観性」の名のもとに固定化してしまう可能性すらある。これはもちろん、啓蒙主義がその建前とした民主的平等性とは真逆の事態である。(第九段)

近代合理主義において、客観性はたしかに主体性の譲渡であったが、それでもそれが理性的存在としての「人間一般」への収斂である限り、自己疎外ではなかった。むしろそれは、一部の人間(貴族・聖職者)から万人へと判断主体を取り戻す民主的な契機であった。この「個人的判断根拠の移譲としての合理的客観性が、却って主体性の回復につながる」という神話のもとにあるのは、移譲される先が理性的存在としての人間そのものである、という合理主義的人間観である。しかしAIのもたらす「客観性」は、こうしたものではない。それは判断理由を人間の理解の届かないところに連れ去ってしまう上に、構造的不正や不平等を隠蔽することで、社会的弱者への抑圧を強化する可能性すらもつ。だとしたら、それは誰にとつての客観性であり、何のための客観性なのだろうか?(第十段)

かくして、深層学習の科学への導入がもたらすのは、単に科学的実践の効率化や目的の変化だけではない。すでに20世紀からのプラグマティズムの潮流の中で、第一原理からの演繹的理解を旨とする基礎づけ主義的科学的観は徐々に後景に退き、より工学的で実用的な知へと強調点が置かれるようになってきた。深層モデルの科学への導入は、単にこの潮流を推し進めるだけでなく、近代以来の科学的理念そのものを改変する可能性を有する。つまりそれは、科学が拠って立つところの「民主的で客観的な合理性」という概念自体にくさびを打ち込む。(第十一段)

もちろんこれは、深層学習によって科学が客観的ないし合理的ではなくなる、という意味ではない。むしろある意味において、それは正反対

である。前述のように深層学習は、科学のオートメーション化を進め、科学者個人の熟練や判断を不要にするという点で、科学をより「客観的」にするものと受け止められるだろう。また深層学習開発の基盤にあるのは高度に発達した数理的理論であり、それが用いられることによって諸科学の合理化はますます進むであろう。しかしそうした要素技術への深い理解は、必ずしもその技術を用いて得られた事柄の理解を含意するとは限らない。<sup>5)</sup> 深層学習の数理は、モデルのパフォーマンスを上げるために役立つが、そうしたモデルがもたらすであろうさまざまな科学的発見についての説明や理解を約束するものではない。そのような発見は、むしろビッグデータと無数のパラメータ\*の中から、ある種の啓示としてもたらされる。であればここでの合理性とは、啓蒙主義が期待していたような自然を遍く照らす光なのではなく、むしろ中世の哲学者トマス・アクィナスが述べたような「啓示の婢としての理性」でしかないのかも知れない。かくしてAIの科学的探求への導入は、科学が合理的で客観的な営みであるというのははたしてどういうことなのか、そしてそれはなぜ望ましいのか、ということについての再考を促すのである。(第十二段)

(大塚淳「深層学習後の科学のあり方を考える」(一部改変)による)

〔注〕エートス——ある社会・文化の人々に共有されている精神性。

ステークホルダー——利害関係者。

デカルト——フランスの哲学者・数学者。

カント——ドイツの哲学者。

悟性——人間の感性に基づく思考能力。

啓蒙主義——人間の理性を信頼し、合理的であろうとする態度。

深層学習——AIがデータをもとに自身で行う機械学習の一つ。

多層なネットワークを用いることで複雑なデータを扱うことを可能とする。

彫琢——磨きをかけること。

先鋭化——過激化。

バックドア攻撃——サイバー攻撃の手法の一つ。

プロトコル——手順。

モデリング——肉付け。形を与えること。

プラグマティズム的潮流——事象に即し、具体的経験をもとに

考える立場。

パラメータ——関数における不定変数。

婢——仕える者。召し使われる者。

〔問1〕<sup>1)</sup> 逆説的な契機をはらんでいる。とあるが、どのような点で「逆説的」なのか。これを説明したものと最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 自分の合理性を示すのに、全く相容れない他者の合理性に基づくルールの中でしか同意を得られない点。

イ 合理的正当化と言いながら、客観的な数値ではなく自身のルールによって判断が行われるという点。

ウ 自分の判断であるにもかかわらず、その判断の合理的正当性は他者の基準によって決定されるという点。

エ 相手の同意をとりつけるために一定のルールを守ることに固執し、本来の主張から逸脱していつてしまう点。

〔問2〕 合理性・客観性・自己疎外の間のこの関係性は、近代の理性概念の内にすでに本質的な仕方を含まれていたともいえる。とあるが、これを説明した次の文章の空欄に当てはまる最も適切な語を本文中の第一段〜第五段のうちから三字で探し、そのまま抜き出して書け。

近代科学の考え方は、判断における  を排除することで合理的で客観的な判断を得ることができるとする近代の理性概念に共通するものだということ。

〔問3〕 「客観化」の極限的な姿を示している。とあるが、『客観化』の

極限的な姿とはどういう状況か。これを説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア AIが特定の個人の恣意性に左右されない客観的なデータ収集を行い、判断そのものを人間に委譲することで、役割を二分するようになってしまうということ。

イ AIが常に公的な基準と照らし合わせながら対象の分析や解釈を行い、本来人間がなすべき客観的な判断までも代わりに行うようになってしまうということ。

ウ AIがビッグデータから特権階級の判断基準を抽出し、それをもとに解釈を行うことで、一般人の思考の特性を完全に排除するようになってしまうということ。

エ AIが膨大なデータをもとにして結論を導き出すだけでなく、これまで人間が主体的に行っていた解釈や判断までも行うようになってしまいうこと。

〔問4〕 啓蒙主義がその建前とした民主的平等性とは真逆の事態である。とあるが、そのような事態に陥るのはどうしてか。その理由を説明したものと最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 一部の個人や団体の考えのみを反映したビッグデータによって訓練された深層モデルは、偏った社会構造とその中に潜む不平等を一層浮き彫りにしてしまう可能性があるから。

イ 深層モデルの判断は、個々の人間の意見が反映されにくいビッグデータに基づくものであり、数的に有利な人々の意見を普遍的なものとして作為的に抽出してしまう危険性があるから。

ウ 深層モデルの判断は、合理的理性による構造的不正の是正がなされないままの現実社会を反映したビッグデータに基づくものであり、人々の偏った考えを内在化させてしまう可能性があるから。

エ 全ての人々の考えをそのまま映し出したビッグデータによって訓練された深層モデルは、主体的な人間の判断が全く反映されない我々の理解の届かないものとなってしまいう危険性があるから。

〔問5〕 深層学習の数理は、モデルのパフォーマンスを上げるためには役

立つが、そうしたモデルがもたらすであろうさまざまな科学的発見  
についての説明や理解を約束するものではない。とあるが、どうい  
うことか。これを説明したものとして最も適切なものは、次のうちで  
はどれか。

ア 深層学習の科学への導入は、科学の基本原則を解明するには役立つ  
ものの、それを応用して作られるさまざまな技術の発展には貢献しない  
ということ。

イ 深層学習は科学的実践の効率化を進め、新たな知見をもたらすことは  
あっても、その背景や意図までを理解した上で提示することはないとい  
うこと。

ウ 深層学習は科学のオートメーション化を進め、合理的な理論を導き出  
すことはできるものの、社会的課題を解決することには寄与しないとい  
うこと。

エ 深層学習の科学への導入は、理論の構築から実用的技術への完全なシ  
フトチェンジであり、学問の理念そのものを改変してしまうものである  
ということ。

〔問6〕 AIの科学的探求への導入とあるが、AIの活用の可能性につ

いて、本文の内容を踏まえ、次の〔条件〕の1～5に従ってあなた  
の考えを二百五十文字以内で書け。

〔条件〕

- 1、や。や。や「などのほか、書き出しや改行の際の空欄もそれぞ  
れ字数に数えること。
- 2 二段落構成にすること。
- 3 第一段落では、AIの活用の可能性について具体的な領域を挙げ  
ること。
- 4 第二段落では、3で挙げた具体例について、あなたの考えを記述  
すること。
- 5 二つの段落が論理的につながり、全体が一つの文章として完結す  
るように書くこと。

## 5

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。なお、「」内は現代語訳である。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

\*おとものやかもち  
大伴家持の歌に、こんな一首がある。

十五夜降り清き月夜に吾妹子に見せむと思ひし屋前の橋（たかはな）

〔十五日の満月のきれいな夜更けあなたに見せようと思つた家の橋ですよ〕

作者はわが家に咲いた夕チバナの花を愛する女性に見せたいと思つた、という。いかにも愛する人をもつ人間の気持をよく歌っているが、さてその花を「十五夜降り清き月夜に」見せたいという。どうせなら満月が清らかに照っている夜、見ればよいではないか。「十五夜降り」とは満月の夜の夜更けという意味だから（別に十六夜とする考えもある）、察するに、朗々たる月の清らかな光の中で夕チバナの花をめぐるというより、どこか翳りがある風光の中でめぐることを、作者はよしとしたのである。

こう歌うには、何かわけがある。ただ平凡に美しい月と花との取合せを歌うのではなく、何か心の奥深いところから発せられる要求があつて、それを代弁するものが、この場合の花である。家持はいつも憂愁をもつた歌人だから、やや傾きかけた満月の光がふりそそいでいる夕チバナのまっ白な花は、そのいいしれぬ深層の心を象徴するものだと考えることができる。

いや、それは家持だけではない。<sup>(1)</sup> およそ花というものは、こんな心の深層を証すものにちがいない。われわれがスマレの花を一輪卓上に挿したい時、視野一面に揺れているススキに感動する時、それぞれの風景は心の深層とひびき合つて、われわれの目をとどめさせるのである。近代の歌人、石川啄木が「友がみなわれよりえらく見ゆる日よ／花を買ひ来て／妻としたしむ」（一握の砂）と歌つた心は、<sup>(2)</sup> 万葉人にとつても同じだったのである。

したがって、万葉の花もただ美しいだけではない。ある意味を、いつも持っている。たとえば、これも家持の歌だが、有名な、

春の苑（さくら）紅にほふ桃の花下照る道に出で立つ少女  
〔春の園の紅色に咲いている桃の花の下まで輝く道にたたずんでいる乙女よ〕

という一首がある。時は春、庭園には今しも桃の花が咲きみち溢れている。さてそこに一人の少女が立ちあらわれた、という歌である。ところが、当時有名な図柄に「樹下美人図」というものがある。これはペルシャからシルクロードを通じて日本にもたらされたもので、正倉院にもこれを描いた屏風が残されている。家持はこれにもとづいて一首を着想したことだつた。また桃は中国では最古の書物『詩経』以来、若い女性の比喩として用いられたし、桃李の花になぞらえて「南国の佳人」を想う有名な詩がある。

こうなると、この一首はどうやら家持が眼前の景色を描写した、などという代物ではないらしいということになる。春の夕べ、当時越中の国にあつた家持は、ほんやりと桃の花を見ながら、その樹下に立つ美女を空想したのである。いうまでもなく、遠く南方の都が美女に溢れているからで、桃は都の表象であつた。

花はいつも、こんな表象としての意味をもっている。もちろん、家持は当時の代表的な教養人だから、桃が女の比喩だといつても、それは一部教養人のことだといわれるかもしれない。しかしそうではない。花はいつも何かのイメージをもつて眺められている。

うち日さつ宮の瀬川（かほほな）の貌花（かほほな）の恋ひてか寝らむ昨夜も今夜も

〔宮の瀬川のおお花のようにさぞや恋ひ慕つて寝ていることであるう ゆうべも今夜も〕

これは東国の農民たちが愛誦した歌である。近くの神社のよこを流れる川がある。そこに貌花が咲く。貌花とはヒルガオのことだ。この花に向けて農民たちは歌う。あの女は俺のことを思いながら寝ているだろうか、このヒルガオのように、と。しかも念をいれて、昨日の夜も今日の夜もというのだから大衆の喝采を博した歌にちがいないが、貌花をこう歌うのは、この花が夜、<sup>(3)</sup> まるで思慕の心を胸中に秘めてまなこをとりするように、花びらをとじるからである。貌花という名前も人間を想像さ

せるのに都合がいい。実はもう一つ、この歌にはユーモアがあつて、社の傍に咲く貌花というのだから、これは神に仕える女性——巫女の類をさしている。ひたすら神に仕える聖女、男をよせつけない聖女が、存外男を思つて寝ているのかというからかいかもあり、その男とは俺のことさ、という自惚がまた人々を面白がらせているから、貌花は、まさにあれこれと意味を背負わされている。いささか集団をよるこぼせすぎたきらいもないではないが、しかし発想の出発は、あのヒルガオの花弁をとじた、しおらしい姿にある。それが人を恋する姿に見えたところから歌が生まれたのである。

万葉人たちは和歌を紙に書くより、より多く口で歌つた。だから彼らはことばの響きに敏感であつた。それは花についても同じで、万葉には、たとえばこんな歌がある。

霍公鳥鳴く峯の上の卯の花の厭きことあれや君が来まさぬ

〔ほととぎすの鳴いている屋根の卯の花の憂いことがあつてか あの方がいらつしやれない〕

作者は小治田広耳。ホトトギスが鳴いている丘の上に卯の花が咲いている。その卯の花のように憂きこと——つらいことがあるからか、あの人に来てくれない、という女性の立場の歌である。これは卯の花Ⅱウツギが「う」という音をもつことから「厭きこと」につづけたものだから、ウツギを見ると万葉人はすぐに「厭し」という語を思い出したことがわかる。とくにこの歌は別に、

鶯の通ふ垣根の卯の花の厭き事あれや君が来まさぬ

〔うぐいすの通う垣根の卯の花の憂いことがあつてか あのかたがいらつしやれない〕

という作者未詳の歌もあつて、下の句がひとしい。習慣的ですからあつた表現が「卯の花——うし」だつたことが知られよう。

春さればまづ三枝の幸くあらば後にも逢はむな恋ひそ吾妹  
〔春になるとまず咲くさきくさの幸くさえあつたらあとでも逢えよう  
う そう恋しがるなよおまえ〕

これも同じである。三枝はミツマタのこと。早春、三つに枝分かれし

た先に白い花を咲かせる風情を愛する人も多である。初句は春になるとまず咲く——三枝と音をつづけ、その三枝を「幸く」という音につづけて恋の趣に歌を転じている。つまり命無事でいたら後に逢うこともあろうから、恋に苦しむなわが妻よ、という歌である。

こうして三枝は、本来「裂き草」だつたと思われる名前を「幸き草」とさへ解釈し直して享受していたと思われる。「さき——さか——さく」という語はそもそもめでたいことばで、先、盛、栄、咲といった漢字で理解できるものだから、万葉人はこよなくこの植物の名前を愛したことであろう。この植物が幸わいを感じさせたのは、あのすくすくと伸びた枝の様子だけではなかつたのである。

もう一つ例をあげると、百合も同じように歌われている。

紀朝臣豊河の歌一首

吾妹子が家の垣内の小百合花後と言へるは不欲といふに似る

〔あなたのお宅の垣内のゆりの花ではないけどゆり——あとでと言うのはいやと言うのと同じです〕

愛する女性の家の中に咲く小百合、とっておいて、さて「後で」というのは拒否と同じですといて女をなじる趣を歌う。まるでわれわれが子供のころ遊びの誘いをことわるのに「後で」といったのと似ていて思わず笑つてしまうが、その時の「ゆり」の音を百合のそれに託して歌うのである。サユリのサは神聖さを示すものと考えたい。今日のヤマユリをいうのだろうというのが通説である。

ユリが、こうして「後」ということばをしのばせて存在していたということは、卯の花が厭、三枝が幸き草をしのばせていたのと同じである。すると、これらはもう、花がことばとして存在したことになるし、逆にいとうと「花ことば」といったものがすでに存在していたのだといつてもいいだろう。もちろん今日いうところの花ことばとは性格が違う。これは主として花のイメージから、たとえば紫陽花といえは冷淡といったことばをみちびくものだ。しかしそれを音におきかえただけで、花がことばとして存在した点はひとしいであろう。

ことに「をみなへし」に到つては、もうこの花から女性のイメージを



払拭かじやくすることはむつかしい。語源からして「女・飯」という説があるくらいだから（もつともこの説は従いがたい）、花の名が先か「女」が先か判然としかねるが、オミナヘシといえは女のイメージがまといつき、「ヲミナ」の音をつねに響かせている。

手に取れば袖さへにほふ女郎花をみなへしこの白露に散らまく惜しも

〔手に取ると袖までも染まるおみなえしがこの白露に散つたら惜し  
い〕

この一首にしても折りとると袖までにおうというのは、この花が女性をしのばせる情感によるのだろう。とにかくオミナヘシは万葉集の中では次のような字で書かれている。

娘子部四、娘部志、娘部思、姫部思、姫押、佳人部為、美人部師、女郎花

これ以外は万葉仮名を使つての宛字あてじだから、この花が女性と切り離せないものだったことは明らかである。花はただ咲いていただけではな  
い。<sup>(4)</sup>ことばとしても美しく花を咲かせていたというべきだろう。

（中西進「万葉のことばと四季」（一部改変）による）

〔注〕 大伴家持——奈良時代の歌人。

詩経——中国最古の詩集。

越中の国——現在の富山県。

小治田広耳——奈良時代の歌人。

紀朝臣豊河——奈良時代の役人・歌人。

万葉仮名——漢字の音訓を借りて、日本語を表記した表音文字。

〔問1〕 およそと同じ意味・用法のものを、次の各文の——を付けた「およそ」のうちから選べ。

ア 文化祭の費用のおよそを計算する。

イ およその見当をつけて作業する。

ウ 私にはおよそ縁のない話だ。

エ およそ発明は必要から生まれるものだ。

〔問2〕 万葉人にとつても同じだったのである。とあるが、どういことか。これを説明したものととして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 近代歌人にとつても万葉歌人にとつても、花は深層心理を代弁するものであり、愛する人への歌人の思いと美しい花のイメージとが合致して、歌が生まれるということ。

イ 近代歌人にとつても万葉歌人にとつても、花は歌人の根底にある思いに影響を与えるものであり、一輪の花とそれをめぐる歌人の感動とが相まって、歌が生まれるということ。

ウ 近代歌人にとつても万葉歌人にとつても、花は心の奥底から発せられる思いの象徴であり、歌人の状況や思いと花のある風景とが共鳴して、歌が生まれるということ。

エ 近代歌人にとつても万葉歌人にとつても、花は言葉で表現できない憂愁の表象であり、翳りのある風景と歌人が抱く繊細な感情とが一体化して、歌が生まれるということ。

〔問3〕<sup>(3)</sup> まるで思慕の心を胸中に秘めてまなこをとじるように、花びらをとじるとあるが、これを表現した部分を本文中の和歌から七字で抜き出せ。

〔問4〕<sup>(4)</sup> ことばとしても美しく花を咲かせていたといふべきだろう。とあるが、筆者がこのように述べる理由を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア 花は華やかなイメージをかもすことで晴れやかな作者の思いを代弁し、万葉人の間で盛んに用いられていたから。
- イ 花は植物や風景としての美しさを表現するだけでなく、歌の中でさまざまな機能することばとして存在していたから。
- ウ 花はただ風景の中で美しく咲いていただけでなく、多様な万葉仮名の宛字によって美しく装飾されていたから。
- エ 花は常に女性のイメージを含むことで恋の趣を表現し、『万葉集』の時代の人々の心を揺さぶるものであったから。

〔問5〕 本文の表現や内容を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア 「桃」が「都」を表すといった中国から伝わってきた花がもつ表象としての意味は、一部の教養人のみが知り得たものではなく、多くの農民達にも常識として共有されていた。
- イ 「霍公鳥」 「鶯の」の二つの和歌は構成こそ異なるものの、思いを寄せる人が姿を見せないことを「厭き」ことと感ずる女性の切ない感情を表現している点は一致している。
- ウ 早春に白い花を咲かせる三枝は「さき」という語の響きが本来もつ情趣とすくすくと伸びる枝の様子から、幸せを感じさせる植物として万葉時代の人々に愛され享受されていた。
- エ 「百合」が「後」という意味をはらんでいたように、表現したい趣をそれと同じイメージをもつ花に託して詠み込む和歌の手法の中で、当時の花ことばは存在していた。

3  
日

日

五  
日